
軽音世界のなかへ！

SORA ソラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

軽音世界のなかへ！

【Nコード】

N0053S

【作者名】

SORA ソラ

【あらすじ】

高校進学について悩む雪彩音^{ゆきあやね}。適当な店に入り、偶然楽器、ギターに興味をもつ。しかしどの高校にも軽音楽部についてまともに取り扱っているところがない。そこで彩音は幼なじみの部田奏太と部活をつくりあげていく。

これからの進路！（前書き）

特別な設定などないので面白いところがないかもしれませんが見守ってください。

これから進路！

中学校からの帰り道。これからどの高校を受験すればいいか考えなければならぬ。

「まだこれからの進路なんて…」

考えていると1つの大きなため息がこぼれる。
なにかしようと思っても気分が乗らない。

「とりあえずなにか店にでも行こうかな…」

私はそこの適当な店に入ってみる。

入るとそこからはノイズのような大きな音が聴こえ、私の腰ほどまでの髪の毛が揺れたように感じた。

「…っ、痛ったー！」

なんだこの音。なんでこんな大きな音が！？

びつくりして店を確認してみると、そこはなにかの楽器店。

奥に進むと楽器の試奏をしている人がいた。じゃーん。と。楽器はギター。

「わあ…。かつこいいなあ…」

思わず見入ってしまった。楽器なんて弾けないのに。

そうやって見ていると話しかけられてしまった。

「おや？お嬢さん、なにか探しているのかい？」

そう、店員がきてしまった。

「あ…、いえ私はとくになにもっ」

そう言っただけで店を出てしまった。「なにしてるんだろ私…」

また中学校の帰り道に戻り自分の家を求めて歩く。しかしそこで1つ浮かぶ。

「…楽器かあ…」

いいかも。

そう考えていると家が見えてきた。

急いでかけこむ。「ただいまー！」

「あら、おかえり。今日は元気ねえ、どうかしたの？」

「これからの進路についてちよつとね。考えてみてることがあってお父さんが帰ってきたら言うね」

ちよつと調べもの、と言ってパソコンの前に座る。

「楽器 ギター…っ」と

検索！とクリックするとずらっ！と並ぶ楽器がいつぱい。

「うっすごい量…」ついびっくりしてしまふ。

ストラト、レスポール…いろいろな種類が。

「……………」

文章を読むのが苦手だ…。目が痛い。目を抑えて床に倒れ込む。

「ただいま。…？彩音^{あやね}、なにしてるんだ？」

「おかえり、お父さん。ん、ちよつと楽器について調べててね」

その話にお母さんもエプロンを外し加わる。

「それで、私は高校で楽器をやるうと思うの」

「へえ、楽器か」

あれ、反応が小さい。

「別にいいんじゃない？彩音がやりたいと思ったんでしょ？」

「う、うん」

びっくりだ。うちの家族なら反対すると思ったのに。

「それで楽器はなにをやるつもりなんだ？」

お父さんが一言。

「楽器は…ギターがいいかな」

お父さんの問いかけにそう返す。

「そうか。頑張れよ」

それだけしか言わなかった。

次の日の朝、いつも通る飽きるような直線を辿り、学校に向かう。いつもおはよう。という声が聞こえないぐらい賑やかなクラスに入る。

だがいつも私のおはように気付く人がある。

「お、あや。おはよう」

今日も気付いた。幼なじみの部田奏太^{そうた}。髪は長くもなく短くもなく。

なにかと運動などをするときには前髪を後ろに持っていくのが特徴かな。

苗字はぶた。…ではない。

部田（とりた）だ。だれでも一回は間違えるだろう。

「奏太は進路…決めた？」

「進路？ いや、内緒だ」そう返してきた。

んむむ、なんで内緒。

「内緒つてなによ、なにか変なことしようと考えてる？」

「いやぜーんぜん」

えー。教えてくれてもいいじゃない。

と言おうとしたときに朝のホームルームのチャイムが鳴る。

「じゃああや、また空いてる時間にまた」

そう言って奏太も人の流れについて席につく。

先生が「みんなおはよう。まだ進路について悩んでる人もいるみたいだな。そろそろ決めておけよ？」

この時期のホームルームはもう進路のことにしか触れない。

まだ、以前の私のように決まってる人が半数ほどいるからだ。

しかし、昨日まで焦っていた私はもう先生の話を聞き流している。

「雪！^{ゆき}聞いているのか？ お前は決まったのか？」

突然先生の一喝。

「え？ あ、はい！」反射で返事を返す。

「そうか、後で職員室で聞かせてくれ。ではホームルームもここま
でだ」

先生が教室を出ていく。

静まり返っていた教室がまた賑やかな教室に戻っていく。

「はぁー、びつくりしたぁー」

一息つく。

「でも彩音がもう進路きめてたのはびつくりだな」

私の友達で薬袋葵^{あおい}。髪は片方を縛っていて少し短め。

苗字はくすりぶくろでなくやくふくろでもない。

薬袋でみない、だ。

なにかと私の友達には珍しい苗字が多い。…私の雪、という苗字も珍しいのかもしれないけど。

「昨日進路決めたんだ。高校に行って楽器をやってみようと思うの」

「へえー楽器かあ。でも彩音、楽器弾けたっけ？」

葵がからかうように言う。

うつ…的確なところを突いてくる…

「弾けないけど…がんばればできるんじゃないかな！」

「ピアノやリコーダーができなかったのに？」

「い、今まで真面目にやってなかったただけだもん」

苦しくなってくる。

「でも楽器って高いじゃん。どうするの？」

あつ…すっかり忘れてた。

「親に頼んでみる」

そこで授業開始のチャイム。最近は自習が多いので6時間、適当に流す。

ようやく放課後。先生にも昨日親に話したことを同じように話すと「だがこの辺に楽器に真剣に打ち込んでいる高校はないぞ。」

……………え。一蹴された。

「とりあえず、他の進路も考えておくんだ。わかったな、雪」

「…はい」

職員室を出る。そこで奏太に会った。

「ちよつと聞こえたけど楽器やるのか。なら、俺と同じ高校行つて部活作つてやらない？」

「…いいけど。私がなんの楽器やるのかわかつてる？」

「いや？全く知らん」

おい。それで誘わないでほしい。

「ギターを弾こうと頑張ってみるんだ」

彩音が言う。

「なら俺もギターをやるかな」

奏太からはそう返ってきた。

「これなら同じ部活、軽音楽部を作れるな」

「ぶつ。なにそれ。でもそれいいかも」

あははと笑いかえす。

「じゃあ決まりだな」

けど実際のところはまだ進路も決まっ
てなく彩音の話が聞こえて楽器も
いいかも。

…と。そういうことらしい。

これから進路！（後書き）

初めての作品です。文章の流れ、話が飛んでるところがあったと思いますが読んで頂きありがとうございました。

楽器のために！（前書き）

続編です。2話目に突入です。飽きてしまったらブラウザを閉じちゃってください。

楽器のために！

「さて、これからどうすつか」

「高校決め…でしょ？」

「軽音部を作るにはこれから高校を決めなきゃいけない。

「そうだな。しかしあや…」

「ん？なに？」

「あやは実力テスト何点くらいだ…？」

「……………150点くらいよ」

「は、恥ずかしい。点数聞かれたうえにこんな低い点数。

「そ、奏太は何点くらいなのよ」

「俺は…350点ぐらいかな」

「自分が恥ずかしすぎる。嫌になってきた…。

「しかも200点差もあるよ。」

「ってことはあやとは200点差だな」

「うわしかも思ってたこと言われた。

「しかも笑顔…。もう嫌…。」

「ってことはやっぱり私が足ひっぱってる…よね、ごめん」

「気にすんな。もともと高校はあやに任せるつもりだから」

「奏太はそれでいいの？」

「別に全然構わん」

「即答。罪悪感が…。」

「なら、私は高校選ばせてもらっね」

「と言ったものの全く決まってない。

「もうあてはあるのか？」

「凶星。早速聞かれるなんて…。」

「まだ決めてない」

「そうか…」

「うっこの空気耐えられないよ…。なにか言葉探さないと。」

「そ、そういえばここの近くに楽器屋があるんだけどさ。行ってみない？」

なんとか話をそらすことができた。ふう…。

「楽器屋か。それはどこにあるんだ？」

「ちょうどこの曲がり角を道なりに行けばつくわ」

道案内をし、楽器屋に早速入る。

中に入ると昨日はいったときと同じような雰囲気があり、また大きな音が聞こえてきた。

あはは、奏太もさすがにびっくりしてる。

「…っ。耳痛いなここ」

耳まで抑えちゃってる。

「そう？昨日もきたから慣れちゃった」

それよりもギター見ない？と言葉を紡ぐ。

奏太はうなずいた。

ギター売り場に足を運ぶとそこにはたくさんのギターが。

「うわぁ、いろんな形があるねー」

ギターって最初はアコースティックみたいなものしかイメージなかったけどこういうのもあるんだね。

知らなかったな。

「あ！この形かっこいいーっ」

「それなんてギターだ？」

「さぁ…店員さんに聞いてみる？」

店員さんに聞くとこれはストラトという形みたい。

「このギターはいくらぐらいするんですか？」

「このストラトですか？これでしたら5万円ですね」

「5、5万円…」

今の私のお小遣いでも後4万円は足りない…。

親に相談してみなくちゃ。

「お、俺はこれがいいかも」

「店員さん、この形は？」

「これはレスポールですね」

へえ、これはレスポールっていうんだ。
ってこれすごく重い。ストラトが軽いだけなのかな…？

「これはいくらぐらいするんですか？」

奏太が聞いてみる。

また店員さんは5万円。と答えた。

くすつ。奏太も、うつ…高い…って顔してる。

「うつ…高い…」

ほら言った。

「あなたがたはギターは初めてみたいですね。ではピックはご存知ですか？」

「「ピック？」」

あ、はもった。

「ピックはギターを弾くときに使うものですよ」

ピックでしたら100円で買えますよ、と。

「奏太、ピック。買ってみる？」

「ああ。今はとてもじゃないがギターなんて買えないしな」

私は大きめのピックを、奏太は小さめのピックを買った。

「とりあえず…。親に相談してみるしかないわね」

「そうだな、じゃあまた明日な」

「ええ。また明日」

楽器屋で分かれてそれぞれ家に向かう。

「ただいま」

「彩音、おかえり」

よし。お父さんはいるみたい。交渉してみよう。

「それで相談があるんだけどさ…」

「なんだ？」

「私、ギター弾きたいって言ったじゃん。それでギターが欲しいんだけど…5万円もするんだよね」

「5万円か。彩音、今いくらある？」

「い、1万円ぐらい」

友達と遊んだりして使っちゃったお金がすごく惜しくなってきた。
やった。

なんかくだらないことに使ってた気がするなあ…。

「そうか。ギターは…そうだな。次の実力テストで250点を越えたらいいだろう」

え。250点…。今の私の100点上。しかも次の実力テストつてもう2週間後じゃん。

「250点!？」

「そうだ。彩音のがんばり次第では買ってあげるよ」

無理。不可能。非条理。不合理。絶望。ー私の知ってる言葉では表せない。

とりあえず勉強するしかないか…。

急いで2階に駆け上がっていき、抱えていた鞆から教科書、ノートを取り出す。

私の苦手な文系の科目…国語、社会は捨てよう。うん。

頭痛くなっちゃう…。

「とりあえず数学からやってみようかな…」

教科書を開いて、ノートに数字や記号を写していき、問題を解く作業に移る。

「えっと… $2 \times$ の二乗をして…」

答えを出してみる。答えは x^2 3になった。

答えを見てみると x^2 6。

「……………はあ」

やっぱできっこないよ。

明日奏太に勉強教えてもらえるように頼むしかないかな…。

そのままやっぱり勉強などでできずに寝てしまった。

次の日。朝、偶然登校中に奏太と会った。

「おはよう、奏太」

「ん、おはよう、あや」

朝、いつもと変わらない挨拶を交わす。

「奏太は楽器のこと…親に相談してみた？」

おそろおそろ聞いてみる。

「聞いたよ。別に買ってもいいって」

むむ、なに。やっぱり成績が上位の方なのっていいなあ。

「あやは？」

ぎくつ。聞き返された。

「わ、私も頑張れば買えるかな」

あー。見栄はっちゃった…。私のほか。

「そっか。じゃあギターの件に関しては大丈夫そうだな」

「そ、そうね」

下手な相槌しか返せないよ。なにしてるんだろ…。

会話を続けているうちにもう学校の敷地内に入っていて、教室の目の前まで歩いてきていた。

中に入るといつもと変わらない、賑やかな教室。

でもさっき正直に言っておけばよかった…。おかげで勉強教えてって言いにくくなっちゃった。

そのまま今日もあつという間に放課後。帰りも奏太といっしょに帰り道を歩く。

「実は…昨日お父さんにさ。実力テストでいい点とらなきゃギターだめって言われちゃってさ」

「いい点って何点くらいだ？」

…250点。ぼそつと言う。いい点なのに奏太からすれば100点も下の点数。

恥ずかしくて普段の大ききで言葉に出すことができない。

「250点か」

あー、聞こえちゃってた。

「それで勉強を教えてほしいんだ」

赤くなった顔を隠すようにしてうつむいて言う。

いいよ、と返事が返ってきた。

これから私と奏太の勉強詰め の2週間が始まるんだな…。

楽器のために！（後書き）

なんか進展の少ない話になったちゃった気がするんですが、できれば続きも見守ってほしいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0053s/>

軽音世界のなかへ！

2011年4月4日23時40分発行